

「第42回日本農業賞・特別部門 第9回食の架け橋賞」 応 募 用 紙

都道府県名	福 島 県	市町村名	喜 多 方 市	関連 JA 名など	J A会津いいで
-------	-------	------	---------	--------------	----------

組 織 名 (取組の名称)	(フリガナ) フクシマケンキタカタシキョウイクインカイ 福島県喜多方市教育委員会 (地域力を活用した「いのちを育てる教育」 …全小学校での「喜多方市小学校農業科」の実践)	設 立 年 月 (取組開始時期)	平成 18 年 1 月 4 日 (平成 19 年 4 月 1 日)
所在地 ほか	<住所> (フリガナ) フクシマケンキタカタシアサニシヨツヤ 〒966-0086 福島県喜多方市字西四ツ谷31番地 TEL: 0241-23-2113 FAX: 0241-25-7075 <代表者> 名前 (フリガナ): 菅井一良 (スガヰ カズヨシ) 役 職: 教育長		
参 加 人 数	組織構成人数 合計: 226人 (内訳: 農業者 87人、農業者以外 139人 農業者以外の詳細: 市立小学校教職員 130名、 教育委員会職員 5名、JA職員 4名) 交流参加人数 合計: 1,909人 (内訳: 全ての市立小学校 17校 3~6年生 H24 (3年生 457人、4年生 443人、5年生 528人、6年生 481人)		
取組の中心的な農業者	名前 (フリガナ): 山田義人 (ヤマダ ヨシト) 外 86 名		

※実施要領を了承の上で応募することに同意します。(代表者自署)

連絡担当者 ※事務局より連絡を取る際の 担当者の方をご記入下さい。 代表者と同じの場合はご記入 いただくなくて結構です。	氏 名 (フリガナ): 学校教育課 渡部 通 (ワタベ トオル) 住 所: 〒966-0086 福島県喜多方市字西四ツ谷 31 番地 電 話 番 号: 0241-23-2113
--	---

推 薦 者 ※推薦者がある場合に ご記入ください。	氏 名: 渡邊 裕樹 所属・役職: 福島県会津農林事務所長 住 所: 〒965-8501 福島県会津若松市追手町 7-5 電話番号: 0242-29-5369
---------------------------------	--

組織名（取り組みの名称）

福島県喜多方市教育委員会

（地域力を活用した「いのちを育てる教育」…全小学校での「喜多方市小学校農業科」の実践）

I. 取り組みのねらい

「喜多方市小学校農業科」においては、喜多方市の基幹産業である農業を教育活動に取り入れ、一連の農作業の実体験活動がもたらす教育的効果を重視した「いのちを育てる教育」を展開し、さらに、地域の農業者に指導と支援をお願いし、地域力を活用した教育として展開している。

本取り組みの主なねらいは、次のとおりである。

(1) 豊かな心の育成

子ども達は、好き嫌いだけで食べ物を残したり無造作に捨てたりしがちである。農業科においては、農作物は単なる食物ではなく、「いのちあるもの」であり「人のいのちをつなぐ大切なもの」であることを学習していく。その中で「いただきます」や「もったいない」など日常生活の中で使われている言葉の意味について考えさせ、人として必要な感謝の気持ちや慈しみの心を育てていく。

また、水田や畑に生きる様々な生物と関わり合うことにより、人間を含め多くの生き物が共に生きる環境とは何か、そのためにはどのようなことが必要かなど、自己中心的な考え方をしやすい子ども達に、多くの人々や自然によって生かされていることを自覚し、様々な立場に立って考えて行動することの大切さに気づかせる契機を与えるようにする。

このように、農業活動という直接的な体験を契機に、様々な面から子ども達の生活を見つめ直させ、豊かな心の育成を図っていく。

(2) 社会性の育成

「農業科」においては、種をまき、苗を育て、植え付けをし、水や肥料の管理、除草、収穫、調理・加工という一連の活動を通して学習を進めていく。徐々に成長していく作物は、子ども達にとってかけがえのないものであり、その「いのち」は子ども達の手に委ねられている。

このような環境のもと、子ども達は自分の責任を自覚し、世話をして農作物を育てていくことになる。農作物の栽培は、すぐに結果の出ることではなく、数ヶ月にわたって世話を続けることにより良い結果が出るものであり、得られる結果は、子ども達一人ひとりの努力がそのまま形となって現れるものである。

このように、数ヶ月にわたる農作物栽培という具体的な体験を通し、子ども達に責任感を持つことや努力することの必要性を気づかせ、目標に向かって取り組むことの大切さ、嫌なことや辛いことでも続けることの意味を理解させ、現代の子ども達に欠如しがちな社会性の育成を図っていく。

また、先人の知恵や郷土の伝統などに触れることにより地域理解を深め、社会の一員としての役割を考えられるようにする。

(3) 主体性の育成

より良い作物を収穫するためには、事前に栽培する作物について調べ、その栽培方法や土壌・天候等の自然について学ぶことが必要であり、栽培過程においても、その時々々の作物の様子をよく観察し、疑問点を調べたり専門家の指導を受けたりすることが必要となる。

一定の目標を設定し計画を立てて取り組み、その時々々に必要な対応策を考える過程には、今求められている主体的な学習意欲や取り組む態度が必然的に育成される。

また、学習を通して自ら進んで他と協力することや周囲の意見に学ぶことの大切さを身に付けさせていく。

Ⅱ. 組織（取り組み）の参加者の構成 ※それぞれの主な役割についても記入して下さい。

(1) 農業者

87名の地域の農業者が「農業科支援員」として委嘱され、教師と一緒に作付け計画の作成、土づくり、種まき、肥培管理などを子ども達に指導している。また、教師が不得手とする農業の専門知識・技術を補っている。学校ごとに地域の担い手農業者から祖父母、地域の市民農園グループ、グリーン・ツーリズム受け入れ農家など多様な農業者が積極的に関わっている。無償ボランティアで、地域の宝である子ども達の教育に関わることを誇りに思う志の高い地域の農業者が支えている。

(2) 小学校教職員

市内全ての小学校において、総合的な学習の時間の中に「農業科」を正規の教育課程として位置づけ授業を実施する。子ども達の様々な課題や気づきを大切に、「農業科」のねらいを達成するとともに子ども達の五感を磨き人間としての基礎的能力を高める。

(3) 教育委員会

農業科実施計画や目標の設定、種苗、肥料等の予算確保、学校への指導、農業科支援員の委嘱、作文コンクールの実施などを行う。また、教員の研修及び農業科支援員との交流会を開催し、課題の把握と改善を進め、「農業科」の質を高め、効果の高いものとするとともに、「農業科」の効果を検証し、取り組みの充実を図っている。

(4) JA

営農指導員による栽培指導、購買事業での資材供給・販売・助言を行う。また、副読本編集委員、農業科アドバイザー、作文コンクール審査員等の要職を担っている。

Ⅲ. 取り組みの具体的な内容、強調しておきたい特徴 ※活動の「写真」・「規約」等がありましたら添付して下さい。

・熱塩小学校や堂島小学校など多くの小学校で、20年以上前から、食農教育を取り組んでおり、農業を学校教育に取り入れることの意義、地域農業者の協力を得ながら学習を進めることについて素地があった。

・喜多方市小学校農業科は、平成19年度より教育特区として始まり、現在は、「総合的な学習の時間」に位置づけられた学習（原則年間35時間の授業時数を割り当て）として喜多方市内の全ての小学校（17校）1,909名の子ども達が取り組んでいる。

・喜多方市は、グリーン・ツーリズムが盛んであり、主に首都圏から毎年多くの子どもたちを農業体験や農家民泊で受け入れている。グリーン・ツーリズム受け入れ農家からは、「都会の子どもたちだけではなく、地元の子どもたちにも農業を体験させてあげたい」との声があがっており、「農業科」でも積極的な協力が得られた。

・小学校農業科副読本（児童用）は、農業高校の教科書をベースに編纂し、一般農家と同じように農業専門用語が使える工夫をし、栽培歴も喜多方市版に変更したりするなどしている。また、副読本解説書（教師用）も作成し、系統的な学習ができるようにしている。

・収穫物を食材とした調理においては、食生活改善員の協力を得て里芋や人参を「こづゆ」などの郷土料理として取り入れているほか、そばを地域のそば打ち団体の協力で手打ちしたり、大豆を豆腐、納豆に加工したり、大根をたくわん漬けにしたりするなど、調理、加工、会食を通して地域の方々との交流を図り、食の伝統を守る活動につなげている。

・加納小学校や堂島小学校、高郷小学校などでは収穫祭が行われ、餅つきや芋煮会、おにぎり等を振る舞い、生産から収穫までの喜びを子ども達たちだけでなく、農業科支援員や地域の方々、PTAなど多くの人達と分かちあっている。「もっとおいしいものを作りたい」「もっと喜ばせたい」と思う農業者の気持ちの理解につながっている。

・市内の学校給食では、地場産農産物の導入を積極的に行っており、熱塩加納では70%以上、その他の給食調理場でも30%以上の自給率を保っている。各地域で生産者の会が組織され、安全・安心な野菜を供給する体制が整っている。顔が見える食材を使用することと農業の苦労を体験することが相乗効果となって、生産する側の心を理解できる子ども達の育成に大きく寄与している。

・熱塩小学校、豊川小学校では、全国米・食味分析鑑定コンクール小学校部門で、3年連続金賞を受賞し、子ども達は、自分たちが育てた米が全国に誇れるものであることを実感するとともに地域の誇りにつながっている。

・単発的な栽培体験ではなく、子ども達が種まきから管理、収穫、調理までの一連の活動を行うことで、作物の「いのち」を感じ、その「いのち」で自らが生かされていることを実感できるようにしている。また、東京電力第一原子力発電所事故に伴う放射能対策に万全にするため、空間線量、土壌濃度、収穫した作物のモニタリングを丁寧に実施し、安全性を確認しながら実施している。

・活動のまとめとして、さらに評価の一助として「小学校農業科作文コンクール」を実施し、子どもたちの成長、農業や食に対する考え方など「農業科」の成果を検証し、目に見える形にして広く周知している。また、市の事業である「ふれあいきたかた農業まつり」で全校の取り組みパネルを展示し広く市民に公開している。

農業科作文コンクールURL：

<http://www.city.kitakata.fukushima.jp/shimin/gyosei/14902/14980/18176/017753.html>

・地域の農業高校と連携し、子ども達と高校の生徒がともに栽培活動に取り組む中で、農業高校生の真摯に農業に取り組む姿を子ども達に感じとらせる交流会を実施している。

・喜多方市小学校農業科研究会を設置し、教育、食育、農業などの専門家（アドバイザー）による農業科の効果検証、課題の把握、改善のための意見交換、考察等を行っている。年3回程度開催し、いただいたアドバイスを基に各学校に改善を促し、より質の高い「農業科」を進めている。

（アドバイザー：県農林事務所職員、農業普及所職員、JA職員、グリーン・ツーリズムツーリズム受入農家、校長会代表、農業科支援員、大学教授等）

Ⅳ. 取り組みが、地域等に及ぼした具体的な影響（下記項目の中で該当するものについて記入して下さい）

(1) 地域の活性化、地域社会の変化など

- ・地域農業者が、農業科支援員として学校教育に関わり、農業の知識や工夫を子ども達に教えることで、高齢者にとっては新たな活躍の場が生まれ、生きがいを見出している。また、学校に地域の方が訪れるきっかけとなり、地域の方々が教育に参加する開かれた学校づくりにつながるとともに地域と学校の一体感が増している。
- ・一部の学校では子ども達が育てたもち米を赤飯にし、地域の独居老人宅へ「笑顔の赤飯配り」を行い、お年寄りに喜んでもらおうと活動を行っており、恒例となっている。過疎化や高齢化など農村地域が抱える課題について考え、助け合える社会を形成するための一助となっている。
- ・収穫祭に地域の方々を招待し、収穫の喜びを地域一体となって祝う学校もあり、交流を通した地域の活性化が図られている。
- ・「農業科」を通して、地域に誇りと愛着をもつ子ども達が増えている。

(2) 消費者または農業者との関係の変化、新たに生まれた交流など

- ・子ども達の多くは、今まで農業に関心を示すことは少なかったが、「農業科」を通して、農業の苦労や大変さを理解し、地域や家庭で身近に農業をしている人を尊敬する姿が見られるようになった。また、農家子弟である者は、祖父母が行っている農作業に興味を持ち、自分も家族の一員として役に立ちたいという成長がみられる。
- ・農業の機械化が進んだことにより、農家であっても農業を手伝ったことのない子ども達が増加している中で、「農業科」は、自分たちでできるように手作業に戻した結果、農業の大変さを学び、進んで祖父母の農作業を手伝ったり、自家の農業について話題にしたりすることが多くなっている。
- ・「農業科」で栽培するほぼすべての農作物について、放射性物質のモニタリング検査を実施しており、自分たちが育てた作物が本当に安全かどうか確認している。また、結果を学校だよりなどで保護者にも伝え、地場産農産物の安全・安心についての理解を深めている。子ども達は、東京電力第一原子力発電所事故による農産物の出荷停止、農産物の風評被害についても、生産者の立場に立ってその苦労や悲しみを感じている。

(3) 食農教育や、地域文化の保存・発展に対する影響

- ・教育委員会が「農業科」を創設し、35時間授業時数を確保したことで、従来実施してきた短時間の食農教育から一歩踏み出すことができた。一連の農作業を体験することで、作物を育てる苦労、そして、難しさを理解し、単なる作物としてではなく、大切に育てた「いのち」として、心から感謝しながら「いただく」ことができるようになった。さらに、「いのち」をいただくことで自分が生かされていることも感じている。
- ・「農業科」としたことで、十分な授業時間と体系的な教育課程を編成でき、「いのち」を育てる食農教育として、子ども達の深い学びと理解が見られるのみならず、「農業科」への取り組みを通して生きる力の要となる豊かな心・社会性・主体性の育成を進めている。
- ・農作業では、基本的に機械を利用せず、子ども達が直接的に体験できるよう手作業による伝統的な作業を行っている。そのことが地域文化の伝承につながっている。また、昔は手作業により家族や地域の協力で農業を行っていたことを知り、農業の大変さや苦労を体感している。
- ・学校だけではなく、家庭においても農業の話題が増え、家族での食育につながっている。

(4) 自然環境や、農村景観の維持・改善など

- ・「農業科」では、作物を育てるだけではなく、川や田んぼなどの生き物調査により、地域の自然環境の実態や保全のあり方についても学んでいる。
- ・どろんこ祭りや田んぼの作業などでは、裸足で田んぼに入って土の感触を味わい、自然の素晴らしさを実感している。それが自然環境の深い理解につながっている。
- ・作文では「田んぼは自然のダム」という表現もみられ、自然の大切さや美しさを理解している。

(5) 将来的に期待される効果、目標など

- ・「農業科」では、学校ごとに地域の農業、自然、人材を活用しながら、子ども達が一連の農作業を通じ地域の理解を深め、それぞれの地域の良さ、豊かさ、喜びを実体験することで、郷土を誇れる人間になるとともに、将来にわたって故郷の応援団となることを期待している。
- ・食や農産物への関心と正しい知識を持った意識の高い消費者の育成につながるものと考えられる。
- ・作物をタネから大切に守り育てることを通じて、「いのち」の大切さや思いやり、協力することの大切さ、自分たちも多くの人々の支えがあって生かされていることなどを理解させ、いじめや不登校等、生徒指導上の諸問題の未然防止につなげて行きたい。
- ・職業の1つとしての農業への関心が高まり将来、地域の農業者として就農することも期待される。
- ・学校教育に農業を取り入れることが、子ども達の生きる力の育成や地域づくりに有益であることを示し、先進的な事例として他のモデルとなるような取り組みを今後も継続していきたい。
- ・「農業科」を通じて、子ども達が、放射能に対する安全・安心について、正しく理解し、風評被害に負けない気持ちをもって元気に活動することは、多くの人々に勇気を与え、さらに、消費者への安心につながり農業、観光、グリーン・ツーリズムなどの地域の日も早い復興につながるものと思われる。

V. 売り上げ、収支決算の内容など

(1) 過去３年間の売り上げ状況についての特記事項

- ・販売は行っていない。

(2) ３年後の売り上げ、収支、借入額などの見通し

- ・市の事業として実施しており、今後も予算措置を行い、事業を継続する。

	参加者 会員数 など	収 入 (うち 取組事業のみの収入)	支 出 (うち 取組事業のみの支出)	借入金 残高
平成 21 年度	実施児童数 1, 0 1 3	なし ()	4, 8 7 5, 0 0 0 (4, 8 7 5, 0 0 0)	0
平成 22 年度	実施児童数 1, 0 9 1	なし ()	4, 0 9 7, 0 0 0 (4, 0 9 7, 0 0 0)	0
平成 23 年度	実施児童数 1, 8 2 8	なし ()	3, 4 1 4, 0 0 0 (3, 4 1 4, 0 0 0)	0